

通航一覽

三

庫	文	閣	內
一七八函	二六	三五三八	和書類
一六架	冊	號	



內閣文庫	
番號	和 35381
冊數	26 (3)
函號	178 444

男

共廿四



周 139

通記

三

家

一

通航一覽卷之三

琉球國部三

目錄

一 中山王來朝



通航一覽卷之三

琉球國部三

中山王來朝



據下りて首卷平均始末論とるごとく琉球使來朝の事ハ由來既ニ定一たり國王此來庭あり一々慶長十三年と云々めとん實一尚家此規據と云々一統ハ今國王の來朝ありと云々ハ今一統末と一統して此條を記ス

慶長十三年庚戌年一為津少將家久

琉球國中山王尚寧と伴い糸府

せんといふ

尚寧ハ左様六月より薩摩國にあり

よつて六月十二

日午多上野久正純より宿驛人馬

等乃事一と家久よ進ん是より先

山口渡河より渡府江平乃郷道守と

命せられ

台徳院殿より津馬を賜はりし

此は往て薩摩國よ左り

渡河より薩摩よ左りしと

し事一と家久正純の書
答ふにせんといふ

慶長十三年庚戌年六月十四日

以上

一書が管といふ仍今度琉球王正同道は

成る此地はと成り下り台誠は路次中

若身より後を察ぬれ然る有る王山下に付る

依りより江戸と路次中なる正岩等并人馬

由地をへ後此の形を詳よりし勅使は誠

し時分於路次中由地をへし松子に此方と

池之可致し方之在るに通路中此池
山中若し方之中心切て此成の番細く候
山口渡河も取付物之部少候按ずるより先動
少補ハ家久の巻
此中入し方定る松子と此りて山口渡河
此方若し方之成此を此在りて此下
内此地相懸し此用等此在りて可し此何れ
不可在疎畧し何も養元此下し此は此
意の方不能具し思惟候云

慶長十八年

本多上野介

八月十日

正純判

羽柴隆興之松

人々

貞享松平大隅守書上

慶長十八年琉球王来朝し別山口初之湯乃
祖父渡河も後府印戸とて案内を此候
此時

台徳院様より伊予馬込領仕

同年八月十六日少将家久中山王尚

寧子と推考へ居城薩摩國麻見島と

發し麻見島城ハ即
麻見郡ニ在リ日と經て洛し入り

系忠の日記
不見ナリ七月十日洛しと出く八月六日家

久忠に薩府しと省し同八日登城しと

東照宮しと浴湯し物と献し右左衛督

殿尾張義直卿常陸介殿紀伊頼宣卿しと物をあ

つし尚寧ハ同十日系省せり

諸記録尚寧も六日

系忠八日浴湯と記せしもの多し
國師日記よりたゞこれ誤りなり

慶長十八年八月十六日家久中山王を

携へて八月六日薩府しし

大権現とてしめしとこれなり

久

寛永傳津家久譜

慶長十八年八月十六日家久中山王と率為

丁麻兒為子發一八月六日瀋府之系也

是より貴久記家忠日記

追加續本朝通鑑同

諸次道中一之西馳走也

鮮人來初と同一人多く居ると云々

江原守く由る殊外治接し居る

貞享松平大隅守書一 為津家譜

薩列舊傳記 大ニ川志

慶長十八年一薩摩國為津陸奥守

自注

又八事云々、琉球乃王合同乃相之七月廿日都

年改名 在之立く瀧河内守一卜る去年為津琉球

令瀧海

按すり下巻に榊山校左衛門平田 五郎左衛門等と瀧海にあり

彼琉球王を

生捕席初一之今及此後八月十日琉球人を

瀋府

官本當代記

創業記

慶長十八年八月十日令地院崇傳より板倉

伴賢守翁守より種万書中

為津屋為月六日ニ沙下島八日ニ山城に出

は琉球王今可有下島中

國師日記

慶長十五年八月八日為津家久於後府光

城事目見

慶長見聞録素紙

慶長十五年八月八日為津又八出仕之物

一 太平布

五 指端

一 銀子

五 指卷

一 銀子

子 枚

大津所へ進之也

按するに書家久の献物乃内志力に脱はる記次條に載る貞享松平大

隅書素紙等

にあり 右兵衛主乃隆主と布へ銀子五枚

光印系五指の女房五人へ銀子貳拾枚花銀子

拾端也為津同道へ琉球座形一丈日中

後府へとて糸と也日十日迄後府

慶長年録

同年八月十日少将家久尚寧子推乃へ

後城へ登つてとて洋謂は尚寧子分物敷

品と献し

為寧々献しる所の品物徳化是同あり
かつありと承りしことごとくを詳掲すと八日家

久お獨り條し混化せしは徳りふれ
今官本苗代祀共長年録等し従ふ

同十八日

城よといく家久ない為寧々んと食意

し徳い格楽あり方隆介殿

此件類
宣々鶴

子代殿

水戸類
房々

舞しせしる家久よ刀

根指をと納りり同日沙崎物あり

十日後府と数して江戸に献く

此時
為寧

乃弟具志頭王子病よりく後河國
奥津澤し歸るむせし同日終よ没し

慶長十八年八月十日琉球王より對面

つま

慶長見聞書朱書

慶長十八年八月十日琉球人出仕に十日忌

後府今日對面也十八日津津しは百名有振

教乃慶介主社と仕り加茂八島鞍馬天

杓梅若夫史源氏供甚老甚此時廣間通ふ

りいしるく年考中しと形櫻しり後

是江戸へ下る後府遠南中琉球王弟次

官本苗代祀 創業記

慶長年録

慶長十五年八月十日中山王為寧後府城

よ来く洋獨一食物を執人 自江為津陸
要子携来

日記摘要

慶長十五年八月八日

大校現家久よ命しつ中山王と登城し

め結入

大校現利ら出陣ありて中山王よ正對面ふさ

走張子百得程く皮 自江又羅紗
と名つく 十二年太平布

武百丸白浪き万あち刀と腰と執人 按すうた
此書乃い

貞享松平大隅守書と考しよち刀浪子も為寧く執物のこと
く花しつれと也中平潘貴久元家忠日記追加考しよちた
此書乃い家久く執りたり
所しつて誤りたり 約命志つく下り西氣色快

然しつり十八日郷食意を心得たりと精樂あり

時よ為陸殿 自江頼
宣卿 中鶴殿 自江頼
房卿 舞曲とふ

し結ふ其間かりけあやうしついめくりて

佐者之類と知くは家久貞宗乃刀根指と
津領は十九日山崎を得かりて後河より江戸
よつゝ

寛永傳津家久譜

慶長十八年八月八日家久中山王と石連登
城は尚寧子銀子百兩度砂十二尋と平布貳
百疋蒸布百疋白銀と可支石古刀一腰鉄と
一袋久も石古刀馬代と外取と鉄と石古

揚すもは家久が鉄物なる寧と同日
の事にあつたは石古條と平と
所代初は早速異

國を志望へとも王と平をくく来物りしむ
事家久は此類備れしと上意なる石古感とを家り
は同十八日山崎宴は下山崎宴とと平陸分殿
山崎殿座とともと平後い貞宗乃石古物とを
大小家久よ下つゝ同日十九日山崎とともと平
後府ととも

貞享元年大隅守書と 島津家譜
薩州舊傳記 紀年録

慶長十五年八月八日琉球王見

公而獻之以緞子百卷羅紗十二尋蕉布百卷太平布二百卷家久獻之以太刀一及白銀一萬兩十八日饗家久有猿樂賜貞宗之刀及貞宗之短刀

津奉譜
貴久記

慶長十五年島津家久引中山王抵駿府

源君大喜八月八日召之府城

源君正烏帽子直衣厚禮貌遇之中山王升堂上拜

源君而退

成功記

慶長十五年八月八日島津隆興與家久琉球乃中山王為寧子推所入登堂上

神若烏帽子直衣子名一太廣間子名一清着座中山王白銀子名及返子百卷羅紗二十

身芭蕉布一匹と平布二匹と刀一腰と
献し、洋鏡送り家久より長光此布刀一腰白
銀手杖と献し琉球を初りる謝詞と述る

武徳編年集成

大正川志

慶長十五年八月十八日為津と在るを振
寄あり常陸介主能と在給ふ自是琉球
王成つれと江戸へ下る

創業記

慶長十五年八月十八日為津より

神君為津陸奥と云は振寄ありと
據すゝふ
紀伊頼房

と云は能をい給ふ

紀藩各名書

慶長十五年八月十八日為津家久より中心王
為寧と為津府城より給く登し猿樂乃大宴を
設けし如頼宣君頼房君舞曲をよみ給ふ
家久より貞宗乃刀乃い短刀と賜ふ暮よきて

退を以て十九日為津家久多し中心王為寧よ
あを紡い糸糸と揚りり明日後府と登り
江戸へ赴く一と命したる人亦日家久中
心王を伴い後府と登り中心王滞留中其
弟病死と後く滞留日と重む

大三川志

慶長十八年琉球王後府よとあり
うち弟子此王子病て死し佐々王子と

いふも墓今も清見寺よあり

定西法師琉球物語 琉球國奉畧○據すりには書りし琉球國
宮中見録よふ佐々王子と記しれども後尾よ載るる至
永七年朱船せり琉球人の甲墳の文よ
具志頭王子とあれはこれ後尾りよや

後河國廬下京郡清見寺古墳

求王院殿大洋尚公大居士

右求王院ハ琉球國中心王為寧公よ愛弟よ
く為懿公弟二の王子也慶長十八年庚戌
八月廿四日江戸へ系向の時卒年茲

後河國巡行記

慶長十四年一泊津薩摩守軍勢と侵す
大将をやり付て琉球國へ押寄て首尾好相隨
彼國人も擄と成て日本へ引連依志貴王も
同く自卒一捕られ來り依志貴王も外の琉球
人も後河へ來り又江戸へ去り終つた
痛くもや有らん依志貴王は眞津まで死
去せしれりの清見寺よ養育あつたを後

琉球人も清見寺を養ひり國へ歸りけり

琉球國宮中見録

琉球人於駿州清見寺故君墳塚文

雉時寶永七年庚寅冬十二月二十三日琉

球國中山王使美里王子尚紀豐見城王子

尚祐等遣使贊官喜年川尚聆前尚克從

於清見寺奉帛故具志頭王子尚宏法號求

王院大洋尚公大居士靈嗚呼先生傳聞故

君中山主尚寧公之愛弟而尚懿公第二之
王子也為其人也孝弟而好忠信就尚寧王
扈從薩州之太守而至駿州不幸遇病時也
慶長十五年庚戌秋八月二十四日辭世於
驛亭時人卜築于茲星霜荏苒至今一百一
年吾國俗稱駿河王子者是也嗚呼痛哉天
涯殞身不得回鄉子孫雖多隔絕遐方經有
歲無求焚香但有清見關月訪寥寂三保松

風問荒涼而已吾輩歷此爭堪感激謹陳菲
禮以表寸忱之微先生有靈鑑之尚享

陸尾

同年八月廿八日少將家久中山王為
寧子伴心印戶下系之八日廿六
日

台德院殿上使_ノ以_ノ中_ノ遠_ノ來_ノ子_ノ
勞_ノ也_ノ北_ノ也_ノ七日精米子儀子錫人

慶長十五年八月十九日西崎より船なりて
諸河より江戸にゆく。十六日

台徳院殿にてを來とふくことありては
と下せらる。十七日よりは使ありて米子儀と

揚り

寛永徳津家久譜
續本の通鑑

慶長十五年八月廿五日江戸より船を來りて
日よは使を下せらる。廿七日又は使と云米子儀

波津領

貞享元年大隅守書
為津家譜 貴久記

慶長十五年八月廿五日家久孫中山王に列
江戸より系舟中途を返りし使と云らる同
廿七日は使と云波津領あり

薩列舊傳記

慶長十五年八月廿五日家久孫中山王江戸より
る廿六日

台徳院殿より家久の宛よき書を奉と勞て
上使より初くうり亦七日重く上使より家久の
宛よき書精米一子儀と初りり

家忠日記追加 天慶日記
參陽武編全集 大之川志

慶長十五年八月亦五日琉球人忠河戸年十
七八小姓十四五小姓ぬ人志やみせん後
引十七八小姓名子才モヒシラ十四五小
小姓才モヒトクといふういふも福ふは五戸

流波小姓より後志やみせんといふらりと云々
云後も日本人と同一但少死ハ遠とふかり
替をよひ右よかい結針也う下此路所よ
何時も宿入し時坐横角鐘太鼓筆の葉のく
管流りい宿入志と云々是と云
りといふ王ハ流在申しも不出矣し有し流
れり解也琉球よ日本よも解とて
詩和歌連歌又猿樂も能ふもあり宗音

ハ禅宗浄土宗聖道宗也

官本當代記 慶長年録 坂氏慶長古日記 ○按するに中
心傳位孫ノ法圓の宗流ハ徳海宗と云ふ云宗のこゝとあり自
傳の書にも浄土宗
等ありし事不之可

同年八月廿八日少将家久中心王尚
寧と推乃ハ江城ニ登つて

台徳院殿乃い

大猷院殿を浄土と云り方物と猷院大

澤少将基宿之言ニ後河守家親奏者

ころり時ノ至有乃緒大名と云々

祇候ハ九月三日家久乃い為寧と云々

庭と云々同七日家久と云々

台徳院殿浄土つゝ喫茶と云々同十

二日家久と云々為寧と云々登城

ハ

慶長十三年八月廿八日家久浄城とのかり
て長光此右ノ一孺辰子百福席は拾張白根と云

又と秋し又ち刀を腰馬一疋印系百斤と

將軍家へ秋し 按ずるに未の
將軍家及下の

若君よりあつたはる 九月

大猷院殿の清奉ふり播中尚寧の秋と統し

二日食意あり同日出茶と錫ハる同十二日

家久中山王と伴いし清城と出る

寛永徳津家久徳

慶長十五年八月廿八日家久尚寧と百列は

登城し尚寧辰子百巻虎皮十枚と平布二百

疋蕉布百端白狼一疋又長巻と清ち刀錢秋
と

若君秋と清ち刀一腰辰子と十巻と平布百

疋蕉布と十巻と槍と 按ずるに尚寧より白狼
ち刀を秋せしとくはし

ハ徳りたり他の徳
と就て考ふる 家久も清ち刀馬代と外取

錢秋と九月三日登城し出食意あり同七

日於出敷寺屋出つし出茶と錫ハる同十

二日又登城仕し

貞享松平大陽子書
島津家譜

慶長十五年八月廿八日登城琉球王獻緞
子百卷大平布二百卷蕉布百卷獻
嗣君以緞子五十卷太平布百卷蕉布五十
卷自家久獻緞子百卷虎皮十枚白銀一萬
兩太刀長光獻

嗣君以太刀馬紅糸百斤九月三日賜美宴
七日召茶亭玉川子乘清風得一碗喉吻潤

其惠至矣十二日家久主伴琉球王而登城

貴久祀家忠目祀追加
後分鈔通鑑又三川志

慶長十五年八月廿八日家久携中山王登
營中山王獻純子百卷太平布二百卷蕉布
百卷於

將軍家獻純子五十卷太平布百卷蕉布五
十卷於

竹千代君依仰最上駿河守家親披露之注自

時侍 從 家久獻 緞子百卷虎皮十枚白銀一万

兩御太刀 自注於
長光

將軍家捧 紅糸百斤御太刀目錄於

竹千代君 九月三日賜 饗應七日召家久賜

茶十二日家久携 中山王登營賜 中山王暇

紀年録 ○ 梅すゝに尚寧
由暇の事ハ次條ニ存ス

慶長十二年 為津氏琉球王をたつとて

東府より 時大澤少將を宿約命とす

かりて 蕭禮抱 露の奉と知心

寛永大澤基岩傳

慶長十二年 琉球國に王來りて 出程の時

最上諸河守 家親奏者り 役と知心

寛永最上家親傳

慶長十二年 家久公初く 武列江戸より 系勅

此より 浩大石元と 出振 拜承 威初日と 右の

より 庭儀 拜承 正度と 次より 酒舟 在徳 正度と 左の

民部屋久保相持屋土居大炊屋と次子列座
也左のふ左の藤堂信成も屋主より酒井頼業
后延壽院 按しるに今大路道に
正銘の法を此號なり 阿部備中守なりと
次子より左と右なり本多信利の卜左の板子織り
ふ左より向く右を左と右を右と記して左を統領下の
事信利名川也久國 按しるに為津氏の藩士
川上國備も久國なり
よ身とくともとく

久國終話

同年九月十六日

台徳院殿家久及びい為寧下ともくまこ
は食意あり家久より眼卜さく水腰刀
後馬かつ橋田よといく宅地とを得い
今の幸揚り屋鋪より久一信よこれと装束屋主とより
想ふに後年琉球使と城の時芝の屋鋪よりせんよといふり
て装束等を改め登城し 琉球の事と仰合あり
とよくは信稱をせりよとや
る尚寧下よも眼揚りて忍命あり 寛永

為津家久信をくくあそ家傳り書に此日尚寧下登城
及び山あり事よ載せられたる元年録よのこ尚寧下は晴と

家久も本宮路を通り下國仕

貞享元年大隅守書云 為津家禧○據するに家久
為寧の帰路を分ちし此書のこゝなり

慶長十五年九月十六日

台徳公為津より歸國此暇を福り入る
るより再い餐燕ありく加賀貞宗より刀
並より駿馬を授けし中山王の故家久
より彼國より使を遣はし改令を施し
しと約命しと蒙る

武徳編年集成

慶長十五年九月戊午賜暇於中山王而賜
宅地於家久且授良馬賜歸國之暇壬戌家
久以中山王發江戸而西歸

續本朝通鑑

慶長十五年九月十六日為津家久及び中山
王為寧より食し即日之使を以て歸國乃
暇を得し家久より加賀貞宗に刀及び馬を

賜ふ亦日家久中山王江戸を發し中山道

より洛ふ出く薩列し向ふ

大ニ川志

徳川治世録

慶長十五年中山王尚寧到江戸拜

大樹乃命曰琉球國累世中山王之所有也

今無由立別姓宜還本國以繼祖考之祀又

命家久賜琉球租税于時家久又引中山王

歸薩摩

成功祀 武徳編年集成 大ニ川志但一六三川志ハ

五月廿八日條武徳編年集成ハ五月廿日條ノ載ル

慶長十五年九月廿七日五七日より琉球王

洛府江戸へ出仕し九月十日日 傳江矣本

立江戸今日到濃列彼阜其是琉球へ有

帰国毎年此調物を可くは之諾意し之

事のしつゝたるは之と云く但此後平今

之彼露琉球の暖國有雷不降始く日本

し雷成りしと物證し

官奉當代祀創業祀

慶長年録

慶長十五年琉球王以戸殿及長濃國使
自平へ到るに長琉球王帰國の後西洞相可
戸之由中へも此奉可有如何と云
相露琉球王又中へ我必中へ宮後貴國
來く初く申す云と云

慶長年録案紙

慶長十五年秋八月家久率尚寧及王親陪

臣等來

神祖 按すもに
台座院殿乃誤りあり 乃命王尚寧使歸

其國以附庸於薩摩州善繼前好敬承先祀
於是則古南島地復舊域矣

南島志

中山王尚寧の戸之來りあり

秀忠公大に憐れむい薩摩侯附庸の國

としいふに諸大名ありて列記中



此次ノ序ノ十石ノ下ノ後ニ七定アリ

此ノ

琉球属和録○據テ右ノ諸記ニ此集ノ所見
ナリ此書何ニ得ルヤ

